GREEN×EXPO 2027

大阪・関西万博と国際園芸博覧会の連携

――万博からつながる園芸博覧会への期待

経済産業大臣
齋藤 健（さいとう けん）

節目を迎えるにあたり

２０２７年に横浜において開催される国際園芸博覧会（GREEN×EXPO 2027）は、２０２４年の３月19日で、開幕まであと３年という節目を迎えます。国際園芸博覧会は、１９６０年から続く歴史ある博覧会であり、日本では１９９０年に大阪で初めて国際花と緑の博覧会（大阪花の万博）を開催しました。１９７０年の日本万国博覧会（大阪万博）から続いてきたわが国の国際博覧会の歴史が、これから大阪・関西での万博、横浜での園芸博覧会へとつながっていきます。国際博覧会条約にも掲げられていますが、万博の意義は「将来の展望を示す」ことにあります。新型コロナを経験し、ウクライナや中東で緊迫した情勢が続く中、この日本で二つの国際博覧会を開催し、世界に対し課題にチャレンジするわが国の強い姿勢を発信できることを誇りに思います。

２０２７年の国際園芸博覧会を成功に導くためには、横浜の地で開催されることを多くの方に知っていただくことが、まず第一歩であると考えています。そのため、経済産業省としては、大阪・関西万博の知名度を活用して国際園芸博覧会の周知を図るため、２０２３年４月に札幌で行われたＧ７気候・エネルギー・環境大臣会合や、同年10月に大阪・堺で行われたＧ７貿易大臣会合に出展した大阪・関西万博のＰＲブースにおいて、国際園芸博覧会もあわせてＰＲを行うなど、国内外に向けた情報発信等に取り組んできました。加えて、経済産業省から、万博行政に精通した職員を２０２７年国際園芸博覧会協会に派遣するなど、体制面での強化等に取り組んでいるところです。

開幕まで残り３年を迎えようとしている今、引き続き様々な機会を活用した機運醸成や博覧会運営の知見共有を行っていき、関係者一丸となって、より一層身を引き締めて準備を進めていきたいと思います。

大阪・関西万博でのイノベーション発信

国際博覧会としては、２０２５年４月13日から大阪の夢洲で開催される大阪・関西万博についても、開幕まで残すところ約４００日となり、開催準備や機運醸成に取り組んでおります。

わが国は、１８６７年のパリ万博において、初めて国際博覧会に出展参加しました。１９７０年に開催された大阪万博は、アジア初の万博であり、これを機にミシンの部品会社が世界と取引を始めて飛躍したという例もあります。以来、１９７５年の沖縄海洋博（沖縄国際海洋博覧会）、85年のつくば科学技術万博（国際科学技術博覧会）、90年の大阪花の万博（国際花と緑の博覧会）、２００５年の愛知万博（２００５年日本国際博覧会）と、過去５回にわたり国際博覧会を開催しており、再び日本で20年ぶりに万博が行われます。この２０２５年の大阪・関西万博では、ポストコロナの新しい世界、日本の新しい技術を発信し世界をリードするという決意で臨んでいき、わが国のイノベーションの可能性をしっかり示していく場にしていきます。

大阪・関西万博は未来社会の実験場ということで、モビリティ、カーボンニュートラル、ライフサイエンス等の分野において世界的に最先端の技術を紹介します。

例えば、未来のモビリティとして「空飛ぶクルマ」を活用した地点間運航を目指しており、具体化に向けた取り組みを進めているところです。万博会場内に加え大阪市内や兵庫県内にもポートを設置し、２地点間運航が計画されています。垂直に離着陸できるため、既存の航空機のように長い滑走路は不要であり、また電動のため、二酸化炭素排出の軽減や、騒音が抑えられることも期待されます。

また、万博全体で脱炭素の取り組みを推進します。２０５０年カーボンニュートラルが達成された社会に向けて、開発し実装されるべき先進的な技術を、来場者の方々に印象に残る形でお見せします。その一つとして、ＥＶ（電気）バスが会場内および外周を走ります。運行管理システム（ＦＭＳ）と一体となったエネルギーマネジメントシステム（ＥＭＳ）の実用化を目指しており、自動運転への挑戦や走行中に利用可能な無線給電の実証を行います。

カーボンニュートラルに向けた取り組みとしては、発電部門における水素利用の実証として、会場外の水素発電による電力を会場内に供給します。水素を活用することで、天然ガスの使用量を低減でき、大量の水素需要も見込めることから、水素社会実現に資すると注目されています。

最近では世界から多くの観光客が日本を訪れており、万博にも多くの国・機関が参加することから、多言語翻訳技術による、言葉の壁がない世界の実現に向けた取り組みも行われます。現状の逐次翻訳に加えて、人工知能（ＡＩ）による実用レベルの「同時通訳」を可能とし、特定の言語に限らないことで、言語を超えた人々の交流が実現されます。

万博からつながる園芸博覧会への期待

これまで述べてきたとおり、大阪・関西万博では様々なイノベーションの可能性が世界に発信されます。世界の知恵を結集し、子どもたち、中小企業、いろいろな人々が刺激を受けて、次の挑戦に向けた気持ちを育んでいくような、参加・体験・行動できる万博にしていきたいと考えています。国際園芸博覧会でも、ＳＤＧｓやＧＸを通じ、社会の持続可能性を追求していくうえで鍵となるであろう様々な技術が世界に発信されます。豊かな緑、鮮やかな花に触れながら、自然の力で社会課題を解決に導く技術や、未来の風景をぜひ会場で体感していただきたいと思います。

大阪・関西万博と国際園芸博覧会は開幕時期が近く、日本の魅力を連続して発信する非常に良い機会です。二つの国際博覧会の相乗効果を最大限に活かしていくことで、日本のさらなる飛躍の契機とするとともに、国際園芸博覧会のテーマである「幸せを創る明日の風景」が、横浜から日本全国、そして世界中に広がっていくことを祈念いたします。